

Title	ポクロフスキーの再評価について
Author(s)	国本, 哲男
Citation	大阪外国語大学学報. 12 p.37-p.59
Issue Date	1962-12-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80206">https://hdl.handle.net/11094/80206</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ポクロフスキーの再評価について

国 本 哲 男

## О ПЕРЕОЦЕНКЕ М.Н.ПОКРОВСКОГО

КУНИМОТО Тэцуо

До преодоления культа личности Сталина в 1956 г. первый советский историк-большевик М. Н. Покровский (1868-1932) оценивался как враг ленинизма, и его теория—как немарксистская, ненаучная. Теперь в Советском Союзе с точки зрения историзма пересматривается его место и роль в развитии советской исторической науки. Сущность переоценки заключается в том, что его борьба против дворянско-буржуазной историографии в условиях дореволюционного времени играла положительную роль в создании пролетарской историографии, хотя в его исторической теории немало ошибок по сравнению с настоящим уровнем науки. После критики ЦК партии и правительства в 1934-38 гг. теоретические ошибки Покровского были исправлены, и советская историческая наука с преодолением культа личности продолжает развиваться на основе марксизма-ленинизма.

В настоящей статье, ссылаясь на статьи, помещенные в журналах <<Коммунист>>, <<Вопросы Истории>>, <<История СССР>>, рассматриваем:

1. Советская историческая наука после преодоления культа личности.
2. Жизнь и творчество М. Н. Покровского.
3. Процесс оценки и переоценки М. Н. Покровского 1) до 1934 г., 2) от 1934 до 1956 г., 3) после 1956 г.
4. Историзм в советской исторической науке.

1. ソビエト歴史学界の新しい動き
2. ポクロフスキーの業績
3. 1934年までの評価
4. 1934年以後の評価
5. 1956年以後の評価
6. ソビエト歴史学における歴史主義

## 1. ソビエト歴史学界の新しい動き

1953年にスターリンが死に、ソビエト社会をおおっていた重苦しい空気がしだいに軽ろやかになるにつれて、歴史学界にも新鮮な風が流れるようになった。はやくも1953年第6号の『歴史の諸問題』誌は、その巻頭論文『ソビエト歴史家の二・三のもっとも量要な課題について』のなかで、ソビエト歴史学の欠陥をつぎのように指摘している。「研究機関や『歴史の諸問題』誌のもっとも大きな欠陥は、ソビエト社会史とソビエト共産党史の研究を十分おこなっていない点にある。ここ数年、これらの問題について、大きな研究が一つも発表されてていない。こんにちまでソビエト社会史にかんする大学用の教科書がつくられていない。他方、ソビエト時代についていままで書かれたパンフレットや論文は、科学的には水準が低く、その大部分が事実のたんなる記述におわり、深くつっこんだものではない。それらには歴史現象の分析において、創造的態度が欠けている」。<sup>①</sup>ここでは、その原因にはまだふれられていない。スターリンはなお、レーニンとならんで理論上の権威者としての位置を与えられている。しかし、スターリンの存在と、彼がみずから参加した『ソビエト共産党小史』（1938）の存在とが、革命以後のソビエト社会史、党史の研究の前進をはばんでいたことは、つぎの予言からうかがい知れる。「ソビエトの歴史家は、もっとも近い将来において、わが国の歴史のもっとも重要な時代、つまり社会主義の時代の研究と、ソビエト社会の指導力であり推進力であるソビエト共産党の歴史の研究とにおいて、決定的な転換をとげるであろう」。<sup>②</sup>

やがて、1954年第10号の『歴史の諸問題』にベルヒンとキムが発表した論文『ソビエト社会史の時代区分について』を契機として展開された時代区分論争において、『ソビエト共産党小史』の権威が、しだいにゆさぶられはじめた。もっとも、この論文は『党小史』を直接批判したものではなく、党の歴史と社会の歴史とはかならずしも一致するものではなく、党史の時代区分を機械的に社会史、さらには文化史その他の歴史にあてはめることができない点を指摘したものであった。ベルヒンとキムはつぎのように主張している。「……共産党の発展段階は、ソビエト社会の一定の発展段階と有機的にむすびついてはいる。しかしこのことから、党の歴史における一つの時期があらゆるばあいには絶対的に国の歴史の時期とかならず一致する、というような結論を導きだしてはならない。党の発展には、その固有な法則があり、その時代がある」。<sup>③</sup>そして、党史時代区分の原理が共産主義建設における一連の課題のなかの「主要な環」であるのにたいして、国の歴史の時代区分原理としては生産様式の発展段階がとりあげられた。

ここでは、党史は党史なりの正当性をみとめたうえで、その適用の問題に検討を加えているのである。だがこのようなおだやかな問題提起ですら、当時としては画期的なものであり、それを

めぐってつぎつぎと論文が発表されていった。しかし、1956年2月にひらかれた第20回党大会を境として、スターリンの権威と『党小史』の権威とが地に落ちたあとのソビエト歴史学界は、さらに活発に、大胆になっていった。1956年第3号の『歴史の諸問題』の巻頭論文『ソビエト共産党第20回大会と党史研究の課題』は、ただちにこの問題を取りあげている。「党の歴史、とくに10月革命以後の時代の歴史の多くの問題が、『ソビエト共産党小史』のなかでは、個人崇拜の観念論的立場から解明されている。『小史』の最後の諸章では、党と人民との役割が黙殺されており、ソビエト権力を確立したあとで党が歩んだ道が容易なものとしてえがかれ、党が克服した多くの困難が無視されている。『小史』では、共産党とソビエト国家の偉大な創設者であり指導者であったレーニンの役割が引きさげられている。この本には事実上の誤りも多くふくまれている」<sup>④</sup>。そして、『小史』にたいする教条主義的な態度が、つぎのように指摘されている。「学術書、パンフレット、雑誌論文、学位論文が、この一般むけの教科者に『追随した』。『小史』にたいするこのような態度は、科学に重大な損害をもたらした。党史研究家は新しい事実の蓄積と理論づけをやめてしまった」<sup>⑤</sup>。

このような情勢のなかで、党史時代区分とソビエト社会史時代区分をめぐる論争も、『小史』そのものの誤りとして評価されるようになった。1956年第6号の『歴史の諸問題』に発表された編集部の総括、『ソビエト社会史の時代区分について』のなかでは、つぎのようにのべられている——『小史』の「時代別区分は、社会主義社会の発生と発展の特性を完全に反映しているわけではない」<sup>⑥</sup>。そして、党史と社会史にそれぞれちがった時代区分原理を認めようとするベルヒンとキムの線がしりぞけられた。ことは、党史時代区分の適用の可否をはるかにこえてしまったわけである。「党の歴史は、ソビエト社会の歴史の有機的な一部分である……ソビエト社会の歴史は、社会主義的社会構成体が形成され、発展する歴史である。革命後の共産党の歴史は、この構成体を形成し、発展させるための闘争の歴史である。社会主義的構成体の発展段階が、革命後の共産党の発展段階を規定する」<sup>⑦</sup>。

つまり、いまや『小史』が絶対的な規準ではなくなったのであり、新しい資料にもとづくソビエト社会史の研究のうえにたって、党史を新しく書きかえることがもとめられるようになったのである。もはやスターリン崇拜にもとづく歴史の勝手な解釈は、許されなくなった。歴史家には、つぎのことがもとめられた。「ソビエトの歴史家の任務は、その研究活動と教育活動において、個人崇拜の遺物を克服し、事件を正当に解明し、レーニンの命題と評価を回復し、それを創造的に発展させる点にある」。「歴史家の任務は、歴史的事実を説明することであって、黙殺することではない」<sup>⑧</sup>。

レーニン主義のうえにたって、歴史主義の立場から歴史を再評価する——これがスターリン崇

拝克服以後のソビエト歴史学の基本方針である。このような流れのなかで、「反マルクス主義的」、「反科学的」というレッテルをはられてきたソビエト初期の最大の歴史家ポクロフスキーの再評価も、当然浮びあがるべき問題であった。すでに第20回党大会直前の1956年第1号の『歴史の諸問題』は、その巻頭論文『史学史の研究について』のなかで、つぎのように指摘している。「かつて、いわゆるポクロフスキー『学派』の単純性、俗流的誤りが正当に批判された。しかし、ポクロフスキーの著作のなかには、重大な誤りとならんで価値のある要素もふくまれていることを、忘れてはならない。ソビエト史学史のなかでポクロフスキーが占める位置を正しくさだめるためには、当時の歴史学の水準を考慮したうえで、彼の著作を研究しなければならない」<sup>⑧</sup>

この課題は、そのごしだいにはたされていった。とくに、1960年第1号の『ソ連邦史』でネチキナが『ソビエト史学史の時代区分について』<sup>⑨</sup> によってはじめた論争は、ポクロフスキーと正面から取りくまなければソビエト史学史の構成そのものが不可能であることを明らかにし、1962年第2号にいたるまで14の論文が、史学史の時代区分と関連してポクロフスキーを取りあげた。これらの諸論文、ならびにその間に出版されたイレリッキー、クドリヤツフの『ソ連邦史学史』（1961）にふくまれたロスラヴァの『ポクロフスキーの見解の形成と彼の歴史観』<sup>⑩</sup> の章は、うえにあげた立場からポクロフスキーの業績を正当に評価している。そして、1961年10月の第22回党大会におけるイリチョフの報告<sup>⑪</sup>、1962年2月の大学社会科学講座主任会議でのスロフの報告<sup>⑫</sup>を契機として、ポクロフスキーそのものをあつかったつぎの諸論文が、あいついで発表された。

ソコロフ『ポクロフスキーの歴史観について』（『コンムニスト』、1962、No4）<sup>⑬</sup>

ドゥブロフスキー『アカデミー会員エム・エヌ・ポクロフスキーとソビエト歴史学の発展における彼の役割』（『歴史の諸問題』、1962、No3）<sup>⑭</sup>

『ドゥブロフスキーの論文の討議』（『歴史の諸問題』、1962、No3）<sup>⑮</sup>

ナイジョノフ『エム・エヌ・ポクロフスキーとソビエト歴史学における彼の位置』（『ソ連邦史』、1962、No3）<sup>⑯</sup>

この小論では、これらの論文をよりどころにして、1) ポクロフスキーの業績、2) 1934年以前の評価、3) 1934年以後の評価、4) 最近の再評価をとりあげ、ポクロフスキー評価を通じてソビエト史学史の動きをみていくことにする。なおここではポクロフスキーの理論の発展とその誤りについては、くわしく論じることができないので、いずれ稿を改めて検討することにしたい。

## 2. ポクロフスキーの業績

ポクロフスキーの研究活動は、大きくつぎの四つにわけられる。

- 1) 1905年にポリシェヴィキに入党するまで——ブルジョアの民主主義者として研究した時代。
- 2) 1917年の10月革命まで——マルクス主義者として貴族・ブルジョア史学を批判し、マルクス主義によるロシア史を構成した時代。
- 3) 1920年代のなかごろまで——執筆活動とともに、文部人民委員代理としてマルクス主義歴史学を組織した時代。
- 4) 1932年に死ぬまで——「歴史家としてのレーニン」の研究にもとづく自己批判の時代。

以下年代ごとに、彼の活動の重要なものと、その概略を説明することにする。

1868 雑階級インテリゲンツィアの家にもまれる。

1891 (23才) モスクワ大学歴史文献学部を卒業。在学中クリュチェフスキーの指導を受け、大学にとどまるよう要請された。卒業後モスクワ女子師範学校その他で歴史を講じる。

1896 (28) ヴイノグラドフ編『中世史読本』(一99)に論文を発表しはじめる。このころ自由主義的歴史家として西ヨーロッパ中世史を研究する。

1898 (30) ストロジェフ編『古代から動乱時代までのロシア史』に論文を発表する。

1902 (34) 急進主義のかどで、講義を停止される。

1903 (35) ゼムストヴオの自由主義運動に加わる。

1904 (36) 『観念論と歴史の法則』でリッケルト、ヴィンデルバント、ランケの観念論を批判し、またクリュチェフスキーの名著『ロシア史講義』を批判する。

1905 (37) ブルジョアの民主主義からマルクス主義へ進み、ロシア社会民主労働党に入党し、ポリシェヴィキに属する。夏ジュネーヴではじめてレーニンに会う。秋モスクワへ帰り、第1次ロシア革命に積極的に参加し、とくに党機関紙の編集に健筆をふるう。ストルウーヴェの合法的マルクス主義を批判し、メンシェヴィキを攻撃する。モスクワの12月蜂起で逮捕されたが釈放され、『軍事技術と民警の問題』を発表する。

1906 (38) ポリシェヴィキ・モスクワ委員会の戦闘組織に参加する。『経済的唯物論』を発表し、リッケルト、カレーエフを批判するとともに、階級闘争による社会の変革をめざすマルクス主義と、進化を主張する経済的唯物論の差異を強調する。もつとも彼の唯物論もまだ生産を土台とするものでなく、経済のうち交換を重要視しており、ここからのちに商業資本主義論がうまれてくる。『観念論と町人主義』においてベルジャーエフを、『宗教と革命』においてメレジュコフスキーを批判し、第1国会の選挙と関連して『勝利者』を発表してカデットの本质をばくろする。年末に党モスクワ委員に選ばれ、第2国会選挙をひかえて扇動活動をおこなう。

1907 (39) 5月にロンドンでひらかれた第5回党大会に代表として出席し、党中央委員候補に選ばれ、ポリシェヴィキ中央機関にはいる。帰国後地下にもぐり、モスクワで活躍する。8月に

レーニンの滞在していたフィンランドにおもむき、レーニンとともに第1次ロシア革命史を計画したが、実現しなかった。彼はまだロシア革命のブルジョア民主主義革命としての性格を理解していなかった。この年から1910年まで、グラナト社の『19世紀ロシア史』（9巻）に『デカブリストのイデオロギー』その他のいくつかの論文を発表する。

1909（41）フィンランドからパリへ亡命し、1917年まで滞在する。この間思想的な動揺があり、ボグダーノフに指導された反ポリシェヴィキ・グループ「フベリョート」に加わる。この年から1914年までに大著『古代からのロシア史』（5巻）を発表し、19世紀末までのロシア史をはじめ、唯物論と階級闘争の立場から体系的に記述し、貴族・ブルジョア歴史学に大きな攻撃を加えた。この書によりロシアの裁判所から有罪の判決を受ける。カプリの党学校で講義をおこなう。

1911（43）「フベリョート」からはなれる。ボロニアの党学校で構義をおこなう。

1914（46）『ロシア文化史概説』第1部を発表し、ミリュコフの『ロシア文化史概説』を批判する（第2部は1918年。『古代からのロシア史』とともに、革命後ただちに上級学校の教科書として使われる）。第1次大戦がはじまると、「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンにしたがい、祖国防衛派や社会排外主義者をはげしく攻撃する。しかし、帝国主義の本質、とくにロシアのそれを正しく理解していなかった。またトロツキーの主催する定期刊行物にも執筆した。

1916（48）レーニンの依頼により、『資本主義の最高段階としての帝国主義』の出版編集をおこなう。

1917（49）8月にモスクワへ帰り、ただちに文筆活動をはじめ、『モスクワ労働者代表ソビエト・イズヴェスチア』の編集に加わる。10月革命には直接参加し、ザモスクヴオレツキー本部の委員となり、『モスクワ軍事革命委員会イズヴェスチア』を編集する。革命後ただちにモスクワ・ソビエト幹部会外務人民委員に任命され、数日してモスクワ労働者兵士代表ソビエト第1議長に選ばれる（1918年3月まで）。

1918（50）年のはじめにモスクワ州人民委員会議長となり、文部国家委員長として活躍する。第1次ソビエト代表団員としてブレスト講和に出席し、「左翼共産主義者」を支持したが、のち誤りを認めて、レーニンの線に忠実にしたがった。5月にロシア共和国文部人民代理（死ぬまで）、同人民委員会議員となり、文部人民委員ルナチャールスキーのもとで上級学校制度、研究組織、教授活動、研究者養成、史料整備などの面で活発にはたらく。国家学術会議を設立し科学・政治部門で活動し、共産主義アカデミー（はじめは社会科学社会主義アカデミー）を設立して指導する。

1919（51）労働大学予備校の設立に力をつくす。

1920（52）党の依頼により『簡略ロシア史』（1923年に完了）を書き、これまでの歴史観をま

とめ、「商業資本主義論」を確立する。レーニンに激賞され、教科書として採用される。

1921 (53) 赤色教授学院を設立して院長としてゼミナールを指導し、若いマルクス主義教育者を養成する。

1922 (54) すべての史料局を中央史料局に統合し、主任として雑誌『赤色アルヒフ』を発行する。以後17・18世紀の農民運動、第1次ロシア革命、10月革命、国内戦にかんする史料を編集し、刊行する。『階級闘争とロシア史の文献』で貴族・ブルジョア歴史家の歴史観を階級的立場から批判する。

1923 (55) トロツキーの歴史観に反対する(1927年まで)。

1924 (56) 『19—20世紀のロシア革命運動史』を発表し、商業資本主義と産業資本主義の対立から革命運動を説明する。

1925 (57) マルクス主義歴史家協会を設立して議長となり、その第1回会議でプガチョフの蜂起その他について自説の誤りを批判する。『1905年革命の意義について』のなかで、「歴史家としてのレーニン」の問題にふれる。これ以後レーニンの著作の研究をつづける。

1926 (58) 『歴史家としてのレーニンとマルクス』のなかで、レーニンの歴史主義と弁証法的方法論を強調する。史料集『プガチョフ党』の序文で、プガチョフの蜂起をブルジョア革命とする自説を批判し、農民戦争として正しく評価する。雑誌『マルクス主義歴史家』を発刊。

1928 (60) 生誕60年が祝われる。ベルリンの「ソビエト歴史家週間」に団長として参加し、オスローの第6回世界歴史家会議に参加する。チエルヌィシェフスキー100年祭にテーゼを書く。『レーニン主義とロシア史』で、レーニンのプロレタリア独裁論の意義を強調する。赤色教授学院の討論で、商業資本主義論のあやまりを自己批判する。全ロシア・マルクス主義歴史家第1回全体会議に出席する。

1929 (61) 科学アカデミー正会員に選ばれる。

1930 (62) 党中央統制委員会幹部会員になる。

1932 (63) 雑誌『階級闘争』を発刊し、その第2号にのせた『ロシアの封建制、およびロシアにおける絶対主義の起源と性格について』のなかで、商業資本主義論の成りたちえないことを全面的に認め、絶対主義について自己批判をおこなう。『レーニンと歴史』で、レーニンがロシア史に深い注意をはらっており、それが現代についての彼の理解を深めた点を強調する。共産主義アカデミーで反対をうけ、党中央委員会に手紙をだし、苦情ををのべる。

1932 (64) クレムリン病院で死ぬ。遺体はクレムリンの城壁にほうむられる。

### 3. 1934年までの評価

1934年に党中央委員会がポクロフスキー批判をおこなうまで、ポクロフスキーにたいする評価



はきわめて肯定的であった。とくにレーニンが彼の歴史家としての才能、党員としての活動を高く評価していた。レーニンは第1次ロシア革命史、工場制工業史の著述についてポクロフスキーの意見をもとめている。また1917年1月には、『帝国主義論』の出版にあたって、出版社がカウツキー批判の箇所をけずろうとしたのをポクロフスキーが防いだのにたいして、レーニンは深く感謝の意を表している。さらに、革命後のポクロフスキーの文部人民委員代理としての活躍ぶりを、つぎのように賞賛している。「文部人民委員部には、例外的な任務をもった二人の、ただ二人だけの同志がいる。それは全般的指導をおこなっている人民委員のルナチャールスキー、および第1に人民委員代理として、第2に科学の問題、マルクス主義一般の問題について欠くことのできない助言者（および指導者）として指導をおこなっている〔人民委員〕代理のポクロフスキーである。ルナチャールスキーとポクロフスキーをよく知っている全党員は、彼ら二人がこの点において、文部人民委員部における一種の『専門家』であることをまったく疑わないのである」。

さらに、『簡略ロシア史』の出版にあたってレーニンはその成功を祝い、著作の改善について温い配慮のことばをのべている。

「同志エム・エヌ！あなたの成功を大いに祝います。あなたの新著『簡略ロシア史』がきわめて気に入りました。独創的な構成と叙述。ひじようにおもしろく読めます。ヨーロッパの諸語に翻訳する必要があると思います。

一つだけちょっと気のついた点をのべさせていただきます。この本が教科書になるためには（当然教科書になるべきです）、年表的索引をつくくわえる必要があります。わたしの考えを説明しましょう——だいたいつぎのとおりです。1) 年代欄、2) ブルジョア的評価の欄（簡単に）、3) あなたのマルクス主義的評価の欄、あなたの本のページを示す。

皮相的な見解におちいらぬために、事実を知るために、古い科学と新しい科学を比較することを学ぶために、学生はあなたの本をも索引をも知らなければなりません。この補足についてあなたの御意見は？

共産主義的あいさつを送ります。

あなたのレーニン」。

もちろん、レーニンはポクロフスキーの理論、とくに商業資本主義論の誤りを十分承知していたはずである。敵にたいしてはあれほど筆の鋭い、容赦のないレーニンが、ポクロフスキーの著作の肯定的な面を強調し、改善について意見をはさむだけで、理論上の欠点にふれていないのは、彼がポクロフスキーを革命家、マルクス主義者として信頼していたからにほかならない。さらに革命直後の条件のもとでは、当時ポクロフスキー以外にロシア通史をプロレタリアートの階級的立場から書けるものがいなかったからであり、これ以上の著作がのぞめなかったからであろう。

レーニンの賞賛を土台に、マルクス主義歴史家の第一人者としてのポクロフスキーにたいする一般の評価は、『ソビエト小百科事典』(1931)によれば、つぎのようであった。「学者としてのポクロフスキーの功績は巨大である。彼はソ連邦ばかりでなく世界で最大のマルクス主義歴史家である。ポクロフスキーはその著作ではじめて、ロシア史全体をマルクス主義的に解明した。ポクロフスキーはブルジョア歴史学と頑強にたたかい、貴族・ブルジョア的『ロシア』史観をばくろし、粉碎し、ロシア史を満たしている階級闘争を分析した。ポクロフスキーはツェリズムの外交問題、ロシア史学史の問題のような多くのきわめて大きな問題を解明し、デカブリスト運動についてマルクス主義的見方を提起し、帝政ロシアの植民地政策の問題をはじめて提起した。10月革命と世界大戦の研究がいま〔1930年〕ポクロフスキーの関心の的になっている。ポクロフスキーの編集のもとに多くの単行論文や、革命運動、外交政策などにかんする大量の記録が出版された…ポクロフスキーは歴史の輝かしい労作を、厳密に科学的であるばかりでなく、きわめてわかりやすく書くのに成功し、そのことがそれらの著作を広範な読者大衆に近づけたのである。ポクロフスキーは芸術家・歴史家であった……真のマルクス主義者としてのポクロフスキーは、その著作のなかで、世界をただ理解するだけでなく、それを改造しようと努めた。彼はけっして古記録のほこりにうずまってしまうようなことがなかった。彼は歴史的事実の深い分析もとづいて、現在と未来の課題を理解するのにきわめて重要な総括的結論を与えている」。

「世界最大のマルクス主義歴史家」、「厳密に科学的」な著述家、「世界を改造」しようと努めた実践家としてのポクロフスキーは、その死にあたって党から深い哀悼の辞をよせられた。「全連邦共産党（ボ）中央委員会は、古参ポリシェヴィキ親衛隊のもつとも著名な代表者、1905年革命と10月プロレタリア革命の積極的な参加者、党の総路線をまもった不屈の闘士、世界的な共産党員・学者、わが国の理論戦線のもつとも著名な組織者、指導者、マルクス・レーニン主義の思想のうむことなき宣伝者の死を深い悲しみに満ちて報ずる」。

また、おなじ教育問題の専門家であったクループスカヤも、党に忠実な革命家としてのポクロフスキーをつぎのように賞賛している。「彼は骨の髄まで党員であり、ポリシェヴィクであった。彼は全身をプロレタリアートの事業をまもるたたかいに捧げた。力がおとろえていっても、彼は最後の一瞬までそのポストをはなれなかった」。

これは、たんなる美辞麗句ではない。たとえ理論的に不十分な点があるにせよ（それはあとでふれるように、ポクロフスキー自身が認め、反省しているのである）、ともに革命をたたかいぬいた戦士の心からの哀悼のことばであり、賞賛のことばであった。ところがわずか2年後に、おなじ党中央委員会が、故人となったポクロフスキーを非難しはじめ、「反マルクス主義的」、「反科学的」というレッテルをはり、その著作を書棚から追放するにいたったのである。それはスタ

ーリンみずから指揮をとった『ソビエト共産党小史』(1938)の出版と深くつながっており、その間にスターリン崇拜とむすびついてソビエトの歴史学界に大きな転換がおこなわれたことを物語っている。しかし、それは1934年に突然おこったのではない。すでにポクロフスキーの生前から歴史学界の内部ですすめられていたのである。

スターリンは1925年にマスロフへの手紙(メートルへの手紙)のなかで、つぎのようにのべている。「わがロシアにも、文筆家のなかの多くの古い指導者や、古い『首領』が消えていく過程がみられます。それは革命的危機の時機にはげしくなり、力が蓄積される時期にゆるまりますが、やはりいつでもおこなわれております。ルナチャールスキーたち、ポクロフスキーたち、ロスコフたち、ゴリデンベルクたち、ボグダノフたち、クラシンたち、など——かつてのポリシェヴィキの指導者であり、のちに二流の役割をはたすようになった人物で、すぐ頭に浮んでくる例は、このような人たちです」。<sup>⑧</sup> さらに1927年には、赤色教授学院の学生がポクロフスキーにたいするレーニンの評価に関連してスターリンの見解をただしたのにたいして、スターリンはつぎのように答えている。「4. ロシア『専政制度』の形成論にかんする問題については、わたしはトロツキーの理論には根本的に同意できない。だがポクロフスキーの理論には、極端さがあり、専政の形成過程について単純化された経済的説明へのゆきすぎがみられはするが、基本的には正しいと思う」。<sup>⑨</sup>

1925、27年といえは、レーニン全集の刊行がはじまっている。ポクロフスキーが育てあげた若い研究者がその柔軟な頭でマルクス・レーニン主義の基礎的な勉強にもとづいて、その師ポクロフスキーの理論上の欠陥を指摘しはじめたときにあたる。ポクロフスキーもレーニンの研究によって自説の欠陥に気がつき、自己批判をはじめだしている。しかしポクロフスキーはなお、当時のマルクス主義歴史家の頂点にたっていたのであり、けっしてまだ過去の人物になったわけではない。したがって、このようなときすでに、ポクロフスキーを「二流の役割をはたすようになった人物」の例にいれ、その理論上の欠陥を指摘したスターリンは、さすがに先見の明があったといえる。ことが理論上の問題にとどまっているかぎり、いかにはげしい批判をあびせようとも、その批判が公正で、理論的なものであれば、肯定的な役割をはたすはずである。しかし、スターリンはレーニンとはちがっていた。彼は温い、建設的な批判によってポクロフスキーがその誤りを克服するのを助けるようなことはしなかった。彼はポクロフスキーにたいして理論上の問題を越えた攻撃がなされるのをゆるしたのである。その点でとくに悪らつな役割をはたしたのは、ソコロフによれば、カガノヴィチである。

カガノヴィチは党中央委員会書記の位置を占めていたのであるが、共産主義アカデミー幹部会にもぐりこみ、赤色教授学院内にきわめて不健全な空気をつくりだした。そのときの事情は党中

中央委員会へあてたゴリンのつぎの報告からうかがわれる。「自分の敵にたいする中傷、ふたまた、無責任なひぼうなどのやりかたが、残念ながら彼らのふつうの闘争手段になった。われわれの決議には賛成しながら、じっさいにはその実行をサポートージュし、同志ポクロフスキーにたいする完全な政治的信頼を示しながら（エリボーフの声明）、同時にポクロフスキーの政治的信用をおとさせるような『カンニング・ペーパー』をこっそりまわし、協会の政治的指導方針の正当性を口にしながら、その方針が失敗するのをまっている——このような事態のなかではたらくのがいかに困難であるかは、証明の必要がないと思う」。<sup>29</sup>

このような空気のなかで、1931年1月に、ポクロフスキーは共産主義アカデミー幹部会の会議の席上、歴史学の分野に批判と自己批判に値するきわめて大きな理論上のあやまりが存在することを指摘した3人の幹部会員の声明を自分の机の上に発見した。これに関連してポクロフスキーは党中央委員会書記にあてた手記をそえて、カガノヴィチに手紙を送った。その内容を知ることにはできないが、ソコロフはつぎのように説明している。「ポクロフスキーの手記は党の事業に献身したポリシェヴィクの熱烈な告白である。この記録から、ポクロフスキーが歴史過程についてのレーニンの考えにきわめて接近していることがわかる。彼は、西ヨーロッパからロシアへもちこまれた『借物の』現象ではなく、経済の発展によって準備された現象としてのロシアにおける資本主義の発展を、あらゆる図式の基礎にしている。彼の考えには、特別な構成体としての商業資本主義は、もはやなくなっている。20世紀の資本主義の発展の状態、ブルジョア民主主義革命の成長転化にかんする問題を、ポクロフスキーはレーニンの指摘にしたがって解決している。

党中央委員会にあてた手紙のなかで、ポクロフスキーは、自分の歴史観の完成にむかってさらに研究することを心からのぞんでおり、レーニンの考えにもづいて歴史課程を解明することを希望している。しかし、赤色教授学院とマルクス主義歴史家協会内部における小グループの中傷運動は、正常な創造活動をきわめて困難にしていると、彼は書いている。

ポクロフスキーの手記はすこしも事態をかえなかった。それは公表されなかった。罵倒はつづけられた」。<sup>30</sup>

おそらくポクロフスキーは大きな不満をいだいて死んだことであろう。だが反ポクロフスキー運動は、この段階ではまだ歴史学界内部の事件であるにすぎなかった。1932年に彼が死んだときには、戦闘的ポリシェヴィクとしての栄光につつまれて、クレムリンの城壁にほうむられた。それから2年たって、死者をむち打つことがはじまったのである。

#### 4. 1934年以後の評価

1934年5月16日に人民委員会議と党中央委員会の有名な決議『ソ連邦の学校における国史の教

授について』が発表された。それには当時の歴史教育の欠陥が、つぎのように指摘されている。

「いきいきとした興味ぶかい形で、年代順にしたがってもっとも重要な事件を記述し、歴史上の人物の特徴づけをおこなって国史を教授するかわりに、学生たちには社会経済構造体の抽象的定義が与えられ、このようにして国史の統一的な記述を抽象的な社会学的図式にかえているのである」。<sup>⑩</sup> ここではまだポクロフスキーの名はだされていない。しかし当時彼の本が教科書としてつかわれており、彼の弟子が教壇にたつていたのであるから、この指摘がポクロフスキーとその弟子たち、いわゆる「ポクロフスキー学派」を目標にしていたことは、明らかである。

ついで1936年1月26日に、スターリン、ジダーノフ、キーロフが署名した『ソ連邦史教科書綱要にかんする意見』、『近代史教科書にかんする意見』が発表された。前者ではつぎのようにのべられている。「……うえに指摘された教科書の編集者〔ワヌナゴ、ミンツ、ロレンスキー〕は、ポクロフスキーの有名な誤りを土台としており、いっさいならず党によってばくろはされ、かつ明らかに成りたちえない歴史的定義と法則を引きつづき固守している。この一つの事実によって、人民委員会と党中央委員会は、わが歴史家、とくにソ連邦史家のある部分に、歴史学にたいする反マルクス主義的、反レーニン主義的、じつさいには解消主義的、反科学的思想が根をはっているという証拠として評価せざるをえない。人民委員会と党中央委員会は、歴史を解消する、つまり科学を解消するこれらの有害な傾向と試みが、まずわが国の歴史家のなかに広まっている誤った歴史観、すなわち、いわゆる『ポクロフスキー的歴史学』派に属する思想と関連していることを重要視して指摘する」。<sup>⑪</sup> この『意見』は、すでに1934年8月8日に党中央委員会に提出されていたもので、1936年になってはじめて公表されたのである。だが、なぜこの年になつて発表され、また歴史学界の問題に政府と党が介入するようになったのであろうか？それはまず第1に歴史学がもつともイデオロギーによって左右されやすく、政治に直結しやすい学問の一つだからである。このころスターリンの個人崇拜と、それもとづく歴史の書きかえが、『党小史』の編集を中心すすめられていた。自分をイデオロギー戦線における唯一創造的理論家、完全無欠な権威者にしたてあげようと志していたスターリンにとって、彼の個人的業績を賞賛せず、理論家としての権威を認めようとしなかったポクロフスキー学派が目ざわりであったのは、当然といえる。

第2に、責任の一半はポクロフスキー以上にポクロフスキー的であった彼の弟子たちの頑迷さにあった。すでに指摘したように、若い世代の研究者は師をのりこえつつあつた。だが一部の弟子たちは批判にたいして師ほど謙虚ではなかった。ドウブロフスキーは彼らのかたくなさを、つぎのように説明している。「ポクロフスキーの誤りにたいする批判、およびある程度は彼の自己批判は、当時上級学校、歴史研究機関、マルクス主義歴史家協会、その他の組織で重要な位置を占めていた彼の弟子のうちのある人びとによってたびたび反対された。彼らは自分たちがまちがっ

て理解したポクロフスキーの権威を守ろうと努め、彼自身が認めた誤りをさえ黙殺しようとした。これらの弟子たちは、ポクロフスキーの基本的な命題をただ盲目的にひきうつし二・三の問題については彼のまちがった命題をさらに押しすすめさせた。ポクロフスキーにむけられた批判に反対しながらも、彼ら自身は歴史学の基本的問題をまじめに解明していかなかった……ポクロフスキーの死後、彼の追従者は自分たちの誤りを固守し、批判にたいしてとくに短気になった。彼らによって組織された歴史学における批判と自己批判とにたいする圧迫は、歴史学の発展をさまたげた」。<sup>⑤</sup> そのころ資本主義に包囲されたなかで一国社会主義の建設が強力に進められていた。とくにファシズムの恐威が身近に感じられ、「社会主義の祖国」の防衛が緊急の課題として浮びあがっていた。ところが、当時の歴史学界には理論的にも、組織の点でも沈滞した空気が、存在しており、それを克服する必要があった。「ソ連邦における社会主義の勝利が近づいた。このような条件のもとで、歴史学には転換の機が熟しており、その結果として歴史学は新しい段階に高まった……1934—1936年がこの転換の年であった」<sup>⑥</sup>とネチキナは指摘している。

そしてポクロフスキー理論に決定的な打撃を加えたのが、1938年の『党小史』である。はじめにあげたように、そこにはスターリン崇拜にもとずく観念論的偏向がふくまれてはいるものの、もちろん正しい点も多くふくまれているのであり、とくにポクロフスキー理論の批判にかんして、それは肯定的な役割をはたしたといえる。

『党小史』の第4章には、スターリンの執筆した有名な『弁証法的唯物論と史的唯物論について』がふくまれている。そのなかでスターリンは、「生産」の意義を前面におしだしている。彼はつぎのようにのべている。「社会の物質的生活の諸条件の体内にあって、社会の特質、社会制度の性格、一つの制度から他の制度への社会の発展を規定する主要な力はなんであるか？ 史的唯物論がこのような力とみなすものは、人類の生存に必要な生活手段を獲得する仕方、食料、衣類、履物、住居、燃料、生産用具等々のような社会が生活し発展できるように必要な物質的財貨の生産様式である」。「歴史上における社会の生産力の変化と発展に照応して、人間の生産関係、人間の経済関係も変化し発展した。歴史上、生産関係の五つの基本的な型が知られている。すなわち、原始共同体型、奴隸制型、封建制型、資本主義型、社会主義型がそれである」。<sup>⑦</sup> 一見してわかるように、ここには「交換」に基礎をおく、一つの社会経済構成体としての「商業資本主義」のはいりこむ余地は、まったくなくなっている。ポクロフスキー理論の本質をなしている「商業資本主義論」は、すでに彼自身によって否定されていたのが、ここにスターリンの権威によって完全にほうむり去られてしまったのである。

さらに、1938年11月に『党小史』の出版に関連して宣伝工作についてだされた党中央委員会の決議のなかで、歴史主義の立場がつぎのように強調された。「最近まで歴史学における反マルク

ス主義的な曲解と凡俗化は、いわゆるポクロフスキー学派と結びついている。この学派は、歴史的事実を歪曲して解釈し、史的唯物論にそむいて現在をもって観点としており、歴史上の事件の起った当時の条件にもとづいて歴史上の事実を分析していない。かくして真実の歴史を曲解したのである」。<sup>⑧</sup> たしかにポクロフスキーにはこのような傾向があり、それを批判した点において、この指摘は正当であったといえる。だが、『党小史』じたいは、はたしてこのような歴史主義的立場から書かれているのであろうか？ 否である。『小史』のなかでポクロフスキーの名はただ一度、しかもきわめて否定的な個所にでてくるにすぎない。それはつぎのとおりである。「1908年に、ボリシェヴィキの一部は社会民主党の代議士を国会から召還することを要求した。『召還派』の名称はここからきている。召還派は彼ら自身のグループ（ボグダノフ、ルナチャルスキー、アレクシンスキー、ポクロフスキー、ブブノフその他）を結成し、このグループはレーニンとレーニンの方針にたいして闘争をはじめた」。<sup>⑨</sup> この本ではレーニンとともにたたかったボリシェヴィキ戦士のポクロフスキー、マルクス主義的ロシア史の開拓者ポクロフスキーは消えてしまっている。絶対的権威をもち、バイブルのように神聖視された『小史』によれば、ポクロフスキーとはレーニンの方針にはむかった敵、レーニンの敵にほかならない。ポクロフスキーにたいする理論上の批判をこえたゆきすぎが、ここにはっきり現れている。やがてそれは、粛清の嵐のなかで拡大解釈され、人身攻撃にまで発展していく。

はやくも翌1939年には、科学アカデミー歴史研究所から、反ポクロフスキー論文集『ポクロフスキーの歴史観に反対して』が出版され、さらに1940年には『ポクロフスキーの反マルクス主義的観念に反対して』がだされた。これらには科学的な立場から書かれた理論上の論文もふくまれており、それらのあるものはいまなお価値を失なっていない。だが、その序文にのべられたポクロフスキー学派攻撃は、つぎのようにきわめて政治的な、きわめてどぎついものであった。「いわゆるポクロフスキー『学派』は、ポクロフスキーの有害な、反レーニンの歴史観によってたくみに偽装しているものの、内務人民委員部の機関によつてあばかれた人民の敵、つまりファシズムのトロツキー・ブハーリン的雇人、妨害者、スパイ、テロリストの側からする妨害活動のための基地であることが、当然のことながら明らかにされた。歴史学戦線の研究者の側からする許しがたい、ばかげた不注意、警戒心の欠除だけが、このレーニン主義の敵の狂暴な徒党が長いあいだ、罰せられることもなく、歴史学の分野で妨害をおこなうことができたという事実を説明することができる」。<sup>⑩</sup>

以上のべたような評価が、基本的には1956年の「個人崇拜の克服」までつづいたのである。そこで再評価にうつるまえに、ポクロフスキーの理論上の誤りとされていたものを、1955年のシドロフの記述によってまとめておこう。

「ボクロフスキーは経済的唯物論の精神でマルクス主義の俗流化をおこなった。彼は歴史的発展の客観的合法則性、社会的生産の二つの側面、生産力と生産関係の発展の弁証法、階級闘争と国の経済的発展との関連、社会的発展における上部構造の能動的な役割、歴史における大衆の創造的役割と個人の役割、および史的唯物論のその他のきわめて重要な命題を理解していなかった。

10月社会主義大革命のあとで、ボクロフスキーはその多くの論文で客観的科学としての歴史学について、本質的にいって解消的な考え方を示した。具体的史料の一面的な研究、歴史の粗雑な社会学化、過去にたいするニヒリスティックな態度、ロシアの革命前の時代の人民大衆の愛国主義的役割の否定、歴史的イベントを『こんにちの観点』から考察する俗流的原則（歴史とは『過去に投影された政治』であるというボクロフスキーの命題）——これらはボクロフスキーの見解の特徴をなしている。彼はその著作で商業資本の役割をきわめて過大評価し、商業資本の発展を資本主義の発展と同一視し、商業資本に16世紀から1917年の2月革命にいたるまでのロシアの発展の動因の役割を与えている。ボクロフスキーは、ツァーリ専政を商業資本の独裁として考察した。したがって彼はロシアが当面していた革命にブルジョア民主主義的性格を与えた客観的な経済的原因を理解しなかった。ボクロフスキーはレーニンの帝国主義論を理解せず、国の経済的発展と、形成された金融・産業独占の役割を無視し、ロシアの帝国主義をツァリズムの侵略政策にだけ認めていた。

ボクロフスキーは諸民族のロシアへの併合の進歩的意義を理解せず、ツァリズムの植民地政策の否定的な諸側面を指摘するだけにおわった。ツァーリ専政の外交政策、とくに彼が多く研究した1914—18年の第1次世界大戦の歴史の問題において、ヨーロッパ列強間の基本的諸矛盾を無視し、帝政ロシアに帝国主義戦争の基本的責任を負わせた。

ボクロフスキーは1905—7年の第1次ロシア・ブルジョア民主主義革命と、1917年の2月ブルジョア民主主義革命の性格と推進力の評価において、重大な誤りをおかした」<sup>55</sup>

## 5. 1956年以後の再評価

「個人崇拜の克服」以後におけるボクロフスキーの再評価、もっとはっきりいえば名誉回復は、いくつかの共通した点をもっている。はじめにあげたソビエト史学史時代区分論争、ドゥブロフスキー、ナイジョノフの論文、およびドゥブロフスキー論文の討議その他は、いずれも1934—36年の党中央委員会によるボクロフスキー批判の核心と、その後のレーニン主義に立脚するソビエト歴史学の再出発とを正当なものとして主張している。ネチキナは『ソビエト史学史時代区分論争の総括によせて』で、つぎのように指摘している。「ソビエト歴史学の発展における第2の大きな時期を、ソビエト歴史学の発展にとって根本的な意味をもつ1934—1936年の党と政府の決議からはじめることには、討論参加者の大多数が賛成した。この命題は正しく、論争をひきおこ



さない』。<sup>⑧</sup>したがって、個人崇拜の克服は、スターリンによってもたられた歴史学のゆがみを正すことによってレーニンに復帰することを意味しているのであって、ポクロフスキーへ復帰することは問題にされていないのである。

では、どの点が再評価されたのであろうか？ まずはじめに、歴史的事実への態度を正すことが主張されている。つまり、歴史主義にもとづく公正さが強調されているのである。「ポクロフスキーの著作は、彼の正しい命題をも、まちがった命題をも考慮にいれて取りあつかい、彼の見解の矛盾性、彼の活動の全期間を通じてのそれらの変化を考察しなければならない。歴史の問題にかんする彼の見解の総体は、その形成と発展において、具体的な歴史的条件とのかかわりあいにおいて取りあげなければならない」<sup>⑨</sup>とドゥブロフスキーは指摘している。そして、このような立場から再検討したとき、なによりも1934—36年批判以後のゆきすぎが目につく。アカデミー歴史研究所の反ポクロフスキー論文集には、ポクロフスキーの初期の著作だけをとりあげて、その後の理論の発展を無視し、しかも叱責と中傷の形で書かれた論文がふくまれている点が指摘されている。

つぎに、うえのような歴史主義的立場にたって公正に検討したばあい、ポクロフスキーの理論は当時としては肯定的な役割をはたした点が、ひとしく強調されている。こんにちの歴史学の発展水準からみると、彼の商業資本主義論や民族主義的ニヒリズム、その他シドロフの列挙している理論は誤っており、マルクス・レーニン主義の立場からみると俗流的で未熟ではある。だが、10月革命前のロシアで貴族・ブルジョア的歴史観が支配していた時代には、また革命直後のあわただしい空気のなかでプロレタリアートの階級的立場にたった歴史学を急ぎ建設する必要があった時代には、彼の精力的な貴族・ブルジョア史学の攻撃は、きわめて肯定的な役割をはたした。彼が経済活動を歴史過程の基礎においたさい、その経済が「生産」ではなく「交換」であったにせよ、やはり一步前進であり、しかも階級闘争を歴史の推進力として前面に押し出した点は、大きな前進であった。またロシア人民の開放闘争の意義を評価せず、プロレタリア国際主義の立場から一般にロシア中心主義、愛国主義を否定した民族主義的ニヒリズムといわれるものも、当時ロマノフ王朝 300 年祭（1913年）を中心に、第 1 次世界大戦にかけて盛りあげられた専政的排外的愛国主義にたいする痛烈な批判としての意義が、あらためて評価されている。

さらに再評価に共通しているのは、ポクロフスキーが自己批判によって自説をたえず発展させていった点の指摘である。この点はすでに彼の生前から『小百科事典』のなかで、ポクロフスキーの思考の柔軟性として強調されていた。「革命的学者の独特な型としてのポクロフスキーの特徴の一つは、ブルジョア学者の大多数の特徴となっているような自説の固執がけっしてみられないという点にある。彼はたえずみずからを改造しており、彼の『矛盾』を非難されるようなことがあっても、まったく平気である」。<sup>⑩</sup>批判にたいする謙虚な態度は、ポクロフスキー自身のことばから

もうかがえる。彼は1931年に党中央委員会へあてた手紙のなかで、つぎのようにのべている。「わたしは多年にわたって自己訂正になれており、この点でわたしを援助してくれたすべての人に深く感謝している」。<sup>⑧</sup> 自己批判は、1925年のマルクス主義歴史協会の第1回会議をはじめ、いたるところで、あらゆる問題についてなされている。それはプガチョフの乱、デカブリストの乱について、1905—07年革命の性格について、帝国主義について、2月革命その他についておこなわれているが、なかでももっとも重要なのは、「商業資本主義論」の批判である。それはナイジョノフが指摘しているように、「まささに商業資本が彼の『建築物の』基本ラインの性格ばかりでなく、屈曲部や突出部、さらには『装飾』をも決定する根本的要素」だからである。「まさにこの思想がポクロフスキーの歴史観の核心をなしているのである。この核心を抜きさってしまうと、その完ぺきさと外的論理性のゆえに当時の人びとにあれほど強い印象を与えた『建築物』全体がたちまち解体してしまい、さまざまな事実の塊と化してしまう」<sup>⑨</sup> からである。

ポクロフスキーは1928—29年に赤色教授学院の討論会で、商業資本の政治的役割を過大評価した点を自己批判し、のちに党中央委員会にあてて、つぎのように書いている。「専政とは『モノマフ帽をかぶった商業資本』であるというような定式にまでいたることは、生産の封建的土台を完全に塗りつぶすことを意味する。ところが、この土台にこそ核心が存在するのである。17世紀の専政はうたがいがいもなく商業資本に依存しており、部分的には外交政策においてその課題を遂行した。しかし、専政それじたいは商業資本ではなく、封建的土地所有の独裁であつた」。<sup>⑩</sup> さらに、この観点は、1930年11月、12月、1931年2月の赤色教授学院のソ連邦諸民族史にかんする三つのゼミナールの閉会にあたつてふたたびくりかえされ、それは『ロシアの封建制、ロシアにおける絶対主義の起源と性格について』と題して、『階級闘争』1931年第2号に発表された。そのなかでは、つぎのようにのべられている。「多くの個々の定式において、ときにきわめて重要なものにおいて、この観念の古い記述がきわめて非レーニンのにひびき、ときには単なる論理的無学であったことはまったく明らかである。たとえば、『商業資本主義』という表現は無学であった。資本主義は生産の体系である。ところが商業資本はなにも生産しないのである」。<sup>⑪</sup> このように、ポクロフスキーは彼の理論のもっとも根本的な訂りを訂正することによって、その「建築物」全体の建てかえに近づいていたのである。

さらに再評価において共通して指摘されているのは、この自己批判が若い世代の批判によってもたらされたというよりも、むしろ彼自身がレーニンの著作を研究することによってなされていたという点である。ナイジョノフによれば、彼はレーニン全集が刊行されるころまでは、レーニンの個々の著作をあまり系統的には読んでいないようである。また革命の理論家・実践家としてのレーニンをきわめて高く評価してはいたものの、「歴史家としてのレーニン」の価値には気が

ついていなかったようである。しかし、1925年の『1905年革命の意義について』のなかで、第1次ロシア革命史にふれた1908年のレーニンの手紙を失ったことに関連して、その手紙が「歴史家としてのレーニンにかんする問題が提起されているこんにち、とくに興味ぶかい」<sup>④</sup> 点を指摘している。ポクロフスキーにとつては、このころ「歴史家としてのレーニン」が注目されだしたのであろう。その後は『業績』の個所でふれたように、年々レーニンの歴史研究、方法論、歴史観を掘りさげてゆき、1931年にはつぎのような点にまでたっている。「ロシア史をどのように理解するかという論争は、レーニン主義をどのように理解するかという論争になった。この論争で引用すべき事実がいかに現代から古くさかのぼっていようとも、この論争にもつとも大きな緊急性をあたえるには、このことだけで十分である。というのは、ロシア史の正しい理解は、レーニンのロシア史理解に依拠してのみ可能なのであるから」。<sup>④</sup> もっとも、ポクロフスキーがすぐそのあとで「わたしがうえてマルクス主義的と名づけたロシア史観は、基本的にはもちろん、決してレーニンのロシア史観と相違するものではなかった」<sup>⑤</sup> とのべているところからみれば、彼のレーニン主義の理解が完全であつたとはいえない。そこから自己批判の不十分さがうまれ、自説を批判しても正しい理論を構成する力の不足がおこったのである。新しい理論、新しいロシア史の構成は、彼が育てあげた若い世代の研究者の手に残された。

最後に、「歴史とは過去に投影された政治である」について。これはポクロフスキーの有名なテーゼとして、彼の歴史観の本質をなすものとされていた。1954年の『百科事典』では「ポクロフスキーは歴史を『過去に投影された政治』として定義し、歴史事件を社会学化し、現代化した」<sup>⑥</sup>と書かれているし、ネチキナは1960年の論文で「ポクロフスキーとその学派の重大な誤り」のなかに、「歴史を過去に投影された政治として解釈しようとする試み」<sup>⑥</sup> をあげている。これは、過去における事実を、その事実の発生した条件から切りはなし、現代の政治的立場から価値判断をくだそうとするもので、まったく非歴史主義的な態度であるといえる。そして、そのことは必然的に研究対象の選択にあたって、現代に直接つながる政治的な問題だけがクローズアップされ、中世、さらに古代が軽視されるという傾向をうみだす。ポクロフスキーにはいしかにそのような傾向があった。ソコロフはつぎのように指摘している。「ポクロフスキーは、その発言のなかでわが国の歴史的過去を、歴史の問題の科学的研究を、当面の政治と、党が解決しつつある課題と結びつけようと努めた。これはいつでも成功したとはかぎらない。しばしば人為的にこじつけられた現代との関連性が、歴史的事件をゆがめるにいたった……ときには彼は抽象的な社会学化をおこなった」。<sup>⑥</sup> また、ネチキナは、ポクロフスキーが1928—29年のマルクス主義歴史家大会で「正常な人間には中世を研究することができない」<sup>⑥</sup> と率直に表明したと伝えているし、ロシア中世史の再建者グレーコフは、1937年につぎのようにのべている。「ソ連邦史の最古代の専

門家は、1934年以後にやっとまじめに養成されるようになった。それはよく知られているように、ソ連邦最古代史の研究をごくわずかしき奨励しなかつたポクロフスキーの学派が支配していた状態から、わが国の科学がぬけだしたときである」。<sup>⑧</sup>

ところが、このテーゼそのものは彼の著作のどこにもみられないこと、それが速記録のなかから引用されたことを、チエレピンとソコロフが強調している。ソコロフは、それが赤色授学院10週年記念集会の速記録からとられたこと、他の個所でポクロフスキーがブルジョア史学を批判するにあたってつぎのようにのべている点を引用している。「すべてこれらのチチャーリンたち、カヴェーリンたち、クリュチェフスキーたち、チェプロフたち、ペトラジツキーたち——彼らはことごとくロシアの19世紀におこなわれた一定の階級闘争を直接に反映していた。そして、わたしがある所で表現したように、これらの諸氏によって書かれた歴史は、過去に投影された政治以外のなにものでもないのである」。<sup>⑨</sup>また、チエレピンはポクロフスキーにおける「歴史と政治」の結びつきの本質を示すものとして、1931年の『レーニンと歴史』のつぎの個所を引用している。「歴史とは政治にたいする説明の章である。そしてこの点に歴史における理論と実践との関連が存在する」。「歴史とは現代の政治と特別に固く結びついた……過去の政治である」。<sup>⑩</sup>

以上「個人崇拜の克服」以後の再評価の要点をみてきたわけであるが、けつきよくのところ、ソビエト歴史学の発展のうえでポクロフスキーのはたした役割、彼の占めるべき位置は、どのようにさだめられたのであろうか？ 要約すれば、当時の歴史学の発展水準から考えて、彼の歴史学は積極的な、肯定的な割をはたした、彼の歴史学の組織づくりもそうであった、ただその理論は、もはやこんにちには通用せず、史学史上の研究対象になってしまった、ということになる。だがネチキナの指摘しているように「科学のその後の発展によってこのようなことがおこったのは、なにもポクロフスキーにかぎることではない」<sup>⑪</sup>のである。ナイジョノフはこの点をつぎのように端的に表現している。「ポクロフスキーは有能な創始者の一人としてソビエト歴史学の発展にすぐれた役割をはたした、と断言できる。ソビエト歴史学がそのもっとも困難な最初の10年間に達成した成功は、彼のおかげである。ポクロフスキーはソビエト史学史のうえで、ふさわしい位置を占めるべきである。それとともに、つぎの点をとくに強調しなければならない。つまり4分の1世紀まえに不当にもけがされたポクロフスキーの名誉の回復を、彼の歴史観への復帰として受けとるものがあれば、それは粗雑な誤りをおかすことになるであろう。このことは問題にもならない。ポクロフスキーの著作は、こんにちではおもに史学史上の意味しかもたないのである。ポクロフスキーの誤りを克服したマルクス・レーニン主義的歴史学は、そのときからあらゆる研究分野にわたって、はるかに前進した」。<sup>⑫</sup>

## 6. ソビエト歴史学における歴史主義

ここまで「歴史主義」ということばをたびたび使ってきたが、史的唯物論でいう「歴史主義」とは、歴史上に存在した諸現象をその発生と発展において、つまり運動において、具体的に、他の諸現象との相互関係において、つまりその現象をうみだした諸条件とのかかわりあいにおいてとらえ、このような立場から歴史的事実を評価することを意味している。

ソビエトの歴史学界では、研究における歴史主義の欠除が、たびたび指摘されている。1938年のポクロフスキー批判では、「現在をもって観点とし、歴史上の事件の起った当時の条件にもとづいて歴史上の事実を分析していない」<sup>⑨</sup>とのべられているし、1956年の個人崇拜批判では、「歴史家の任務は、歴史的事実を説明することであって、黙殺することではない」<sup>⑩</sup>と強調されている。たしかに、それぞれの段階におけるソビエト歴史学には、歴史主義的立場が欠けてはいた。だが、歴史主義的言辞が欠けていたわけではない。ポクロフスキーは1929年に、「先入観にもとづいて、存在しなかったことに歴史を結びつけようとするようなものは、レーニン主義にも、歴史学にも、ただちに違反するであろう」<sup>⑪</sup>とのべている。スターリンは、『弁証法的唯物論と史的唯物論について』のなかで、つぎのように指摘している。「世界に孤立した現象がなく、いつさいの現象がたがいにむすびつき、たがいに制約しあっているとすれば、歴史家がよくするように、歴史上のあらゆる社会制度やあらゆる社会運動は、『永遠の正義』とか、その他なんらかの先入観の見地から評価すべきでなく、この制度や、この社会運動をうみだした諸条件や、それらがむすびついている諸条件の見地から評価すべきだということは、あきらである……すべてのことは、条件、場所、時間に依存している。社会現象のこのような歴史的な扱いがたなしには、歴史についての科学の存在と発展がありえないことは、もちろんである」<sup>⑫</sup>。

ただ、これらの歴史主義的言辞がたんなる言辞におわってしまって、歴史家の実践のうえで生かされてこなかったことは、『党小史』ひとつとりあげてみても、あきらかであろう。では「個人崇拜の克服」以後、歴史主義は、はたして歴史家の実践のうえでまもられているであろうか？うえにみてきたとおり、ポクロフスキーじたいの再評価については、正しくまもられており、ソビエト歴史学の正常化が一步すすめられたといえる。

しかし、この再評価にも、問題がふくまれている。それはスターリンについてである。ソビエト史学史の時代区分論争、およびポクロフスキー再評価論文が、1934—36年の党中央委員会と政府の決議を正当なものとして認めているのは、さきにあげたとおりである。ところがそのいずれもが、それを党と政府の功績としているだけで、スターリンの功績として取りあげていないのである。1936年の決議が、スターリン、ジダノフ、キーロフの署名によるものであり、スターリン

がポクロフスキー批判を指導し、ソビエト歴史学を大きく前進させたことは、明らかである。もちろん、個人崇拜にもとづくゆきすぎがありはしたが、当時の歴史的条件から考えて、ソビエト歴史学の発展のうえでスターリンのはたした功績は、正当に評価すべきである。なお、スターリンのおかした誤りは徹底的に追求すべきである。その結果彼が「殺人鬼」であったということになってもそれはそれでかまわないが、ただその功績は功績として、黙殺することなく正当に評価しなければならない。「党が個人崇拜を批判したことの眼目は、この崇拜の有害な結果をとりのぞき、それによって社会主義の地歩を強化することであって、党生活と国の生活においてスターリンのはたした積極的な役割を、十把ひとからげに否定することではなかった」<sup>⑧</sup> という新しい『ソ連邦共産党小史』（1959）の指摘が、いまの状態ではまもられていないといえる。それは、権力にたいしてきわめて従順なソビエトの歴史家の主体性の問題とかかわりあってくる。再評価の論文の筆者や、ドゥブロフスキー論文討論会の発言者は、過去はおけるポクロフスキー批判のゆきすぎを、もっぱら「スターリン崇拜」の責に帰してしまって、その当時における自分たちの言動についての反省がほとんどみられない。ソコロフがこのような傾向についてつぎの警告を発しているのも、当然といえる。「ポクロフスキーを鼻であしらったある歴史家たちは、ソビエトのすぐれた学者の創造活動を評価するうえで自分たちのおかした誤りを認めることを忘れて、あわてて彼の賞賛者の役割をはたそうとしている」<sup>⑨</sup>。

ポクロフスキー再評価のあとにはさらに、ソビエト史学界の今後の正常化の問題がのこされている。ナイジョノフのつぎのことばは、どうであろう。「もちろん、ポクロフスキー、あるいはその他だれであれ、大小の誤りをおかさないで、すべてこれらの多種多様な任務を遂行することができたと考えるのは、不自然である。だが、これらの誤りをとりあげて、教育、研究員の養成、とくに歴史学のうえで、ポクロフスキーがおこなった大きな、実りゆたかな活動をすっかり否定するものは、歴史主義の原則からはずれるであろう」<sup>⑩</sup> この「その他だれであれ」ということばのなかには、いまあげたスターリンのほかに、トロツキー、ブハーリンをはじめ、多くの人物がふくまれるはずである。いまなおトロツキー、ブハーリンについては、ソビエトでは、かつてポクロフスキーにあてはめられていたような、きわめて一面的な評価がおこなわれている。このような人物の功罪が自由に、公平に、歴史主義的立場から評価されるようになったとき、はじめてソビエト歴史学が完全に正常化されたといえるであろう。

ここでソビエトの歴史家の主体性やソビエト歴史学の正常化の問題をとりあげたのは、それらが直接われわれ自身の問題であるからにはほかならない。科学としての歴史学を成立させるためには、時の権力の方針にはかかわりなく、あくまでも「歴史主義」の立場を貫かなければならないことが、ソビエト歴史学の動向からうかがうことができる。

(1962, 9, 30)

註

- ① “О некоторых важнейших задачах советских историков”, (“Вопросы Истории”, 1953, №3, с.4.)
- ② 同 上。
- ③ И. Б. Берхин, М. П. Кам: “О периодизации истории советского общества”, (“Вопросы Истории”, 1954, №10, с. 72.)
- ④ “XX съезд КПСС и задачи исследования истории партий”, (“Вопросы Истории”, 1956, №3, с. 5.)
- ⑤ 同 上。
- ⑥ “О периодизации истории советского общества”, (“Вопросы Истории”, 1956, №6, с.58.)
- ⑦ 同 上, 59ページ。
- ⑧ “Вопросы Истории”, 1956, №3, сс. 5,7.
- ⑨ “Об изучении истории исторической науки”, (“Вопросы Истории”, 1956, №1, с. 11.)
- ⑩ М. Б. Нечкина: “О периодизации истории советской исторической науки”, (“История СССР”, 1960, №1, сс. 83-89.)
- ⑪ А. С. Рослава: “Формирование взглядов М. Н. Покровского и его историческая концепция” (Иллерицкий, Кудрявцев: “Историография истории СССР”, М.-1961, сс. 469-480.) 記述は革命前でおわっている。
- ⑫ “Правда”, 1961 X 26.
- ⑬ “Правда”, 1962 IV 4.
- ⑭ О. Соколов: “Об исторических взглядах М. Н. Покровского”, (“Коммунист” 1962, №4.)
- ⑮ С. М. Дубровский: “Академик М. Н. Покровский и его роль в развитии советской исторической науки”, (“Вопросы Истории”, 1962, №3.)
- ⑯ “Обсуждение статьи С.М.Дубровского...” (“Вопросы Истории”, 1962, №3.)
- ⑰ М. Е. Найденев: “Формирование взглядов М. Н. Покровского и его место в советской историографии”, (“История СССР”, 1962, №3.)
- ⑱ В. И. Ленин: “Сочинения”, т.32, сс. 102, 103.
- ⑲ В. И. Ленин: “Сочинения”, т.36, с. 488. これらの資料はスターリン時代には公表されていなかった。また。また引用されるばあいもきわめてゆがめて、悪意に解釈されていた。
- ⑳ “Малая Советская Энциклопедия”, изд. 1, 1931, т. 6, с. 633.
- ㉑ “Правда”, 1932 IV 12. (“История СССР”, 1962, №3, с. 69.)
- ㉒ 同 上 (“Коммунист”, 1962, №4, с. 76.)
- ㉓ И. В. Сталин: “Сочинения”, т.7, с. 43.
- ㉔ “Коммунист”, 1962, №4, с. 77. スターリン全集第9巻 176—178ページでは、この箇所ははぶかれている。
- ㉕ 同 上。
- ㉖ 同 上、78ページ。
- ㉗ これらの決議は、『歴史の研究によせて』（“К изучению истории”, М. 1938）にまとめられているが、入手できなかったので、毛沢東編『マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン思想方法論』（五月書房版、邦訳）によった。369ページ。
- ㉘ 同 上, 372ページ。
- ㉙ “Вопросы Истории”, 1962, №3, с. 28.
- ㉚ “История СССР”, 1960, №1, с. 89.
- ㉛ “История ВКП (б)”, сс.114, 119. [国民文庫版, 第1分冊, 189, 195ページ]
- ㉜ 毛沢東編『思想方法論』394ページ。
- ㉝ “История ВКП (б)”, с. 130, [第1分冊, 211ページ]
- ㉞ “Против исторической концепции М. Н. Покровского”, М. -Л. 1939, с. 5. (“Вопросы Истории”, 1962, №3, с. 29.)

- ③⑤ А. Л. Сидров: "Покровский" ("Большая Советская Энциклопедия", 1955, т. 33, с. 492.)
- ③⑥ М. В. Нечкина: "К итогам дискуссии о периодизации истории советской исторической науки", ("История СССР", 1962, №2, с. 73.)
- ③⑦ "Вопросы Истории", 1962, №3, с. 27.
- ③⑧ "Малая Советская Энциклопедия", 1931, т.6, с. 664.
- ③⑨ "Коммунист", 1962, №4, с. 75.
- ④⑩ "История СССР", 1962, №3, с. 62.
- ④⑪ "Коммунист", 1962, №4, с. 75.
- ④⑫ М. Н. Покровский: "О русском феодализме, происхождении и характере абсолютизма в России", 1931, ("Русская история в самом сжатом очерке", 1932, Приложения, с. 493.)
- ④⑬ "История СССР", 1962, №3, с. 65.
- ④⑭ "Русская история в самом сжатом очерке", с. 493.
- ④⑮ 同上。
- ④⑯ "Энциклопедический Словарь", 1954, т.2, с. 683.
- ④⑰ "История СССР", 1960, №1, с. 88.
- ④⑱ "Коммунист", 1962, №4, с. 72.
- ④⑲ "История СССР", 1960, №1, с. 87.
- ⑤① Б. Д. Греков: "Итоги изучения истории СССР за двадцать лет", 1937, ("Избранные труды", 1960, т. III, сс. 393-394.)
- ⑤② "Вестник Коммунистической Академии, 1928, кн. XXVI, (2), сс. 5-6. ["Коммунист", 1962, №4, С. 73.]
- ⑤③ "Вопросы Истории", 1962, №3, с. 73.
- ⑤④ "История СССР", 1962, №2, с. 68.
- ⑤⑤ "История СССР", 1962, №3, с. 71.
- ⑤⑥ 毛沢東編『思想方法論』, 394ページ。
- ⑤⑦ "Вопросы Истории", 1956, №3, с. 7.
- ⑤⑧ М. Н. Покровский: "Октябрьская революция", 1929, с. 6. ["Коммунист", 1962, №4, с. 73.]
- ⑤⑨ "История ВКП (б)", сс. 104, 105. [第1分冊, 173, 174ページ]
- ⑤⑩ "История Коммунистической партии Советского Союза", 1959, с. 645. [国民文庫版, 第3分冊, 971ページ]
- ⑥① "Коммунист", 1962, №4, с. 79.
- ⑥② "История СССР", 1962, №3, с. 71.